

瀬戸内の町並みと建物について

Landscape Architecture: A Row of Buildings by the Inland Sea “SETOUCHI”

(2000年3月31日受理)

中 谷 青三郎

Seizaburo Nakatani

Key words : 町並み, 港町, 塩田

は じ め に

古い建物が取り壊され、新しい町並みが形成されていく光景は日本中どこでも見られ、珍しくなくなって久しいが、国や県などの文化財として指定される建物のように必ずしも文化財的な価値は高くないが、日本的風情のある、歴史を感じさせる伝統的な質の高い建物や町並みは少なからず存在するものと考えられる。

中国地方の瀬戸内側は歴史的にみて海上・陸上交通の要所として、古くから拓けた所であり、また、塩の生産地としても知られて、古くから町を形成している所は多い。

今回、港と塩をキーワードにしてこの地方の町並みと建物について概略をみることにする。

瀬戸内の歴史

古代律令制度では、都（平安京）を中心に7つの街道があった。山陽道、山陰道、南海道、西海道、東海道、東山道、北陸道であり、このうち山陽道は都と大宰府を結ぶ、主要幹線道として位置付けられていた。この山陽道は兵庫県、岡山県、広島県、山口県の南、ほぼ現在の国道2号線に沿って走っており、その重要性は現在にも引き継がれている。この街道と沿うように瀬戸内海の海運交通も盛んで、河川を通じて内陸部の物資が瀬戸内沿岸に集積され、この港から畿内に運ばれた。国ごとに国津があったことが想像される。延喜式に見られる地名を現在のどの位置に比定するかは難しい問題であるが、その存在は明らかである。

播磨国、備前国、備中国、備後国、安芸国、周防国、長門国、それに美作国が山陽道に含まれる。美作国以外は瀬戸内海に面し、港を各地に開いていたと想像できるが、延喜式にはなぜか記載がない。一方、美作国は海に面していないが、片上を美作国の国津としている。吉井川の水系を利用し

たものと想像される。また新見は東寺の庄であり、ここからも高梁川を利用し瀬戸内海沿岸まで物資を運んでいた。このような例は各地に存在する。古代では河川を利用し物資を海岸沿いの港まで運び都や畿内へ運ばれた。しかし、このような河川を利用し物資が集まる河口の港は、河川による土砂の堆積により、海岸線に変化があり、港の位置は移動している例は多い。福山の草戸千軒もこのような例で、今は河川の中州になっている。

これに対して、地形の有利性を利用した風待ち、潮待ちの港はあまり地形の変化がなく、その位置で今も港として機能しているところが多い。もっとも今では風待ち、潮待ちの必要もないし、物資の集散地としての機能を一部の港を除いて今は失っている。漁港や瀬戸内に浮かぶ島々とのフェリーの発着港として現存する例が多い。国際貿易港として、物資の集散地としての機能を備えた港としては、神戸、下関はその代表格である。

延喜式には都または大宰府までの日程を陸路については、往路、復路にわけて記載している。上りの所要日数が必ず多く、ほぼ下りの日数の倍が必要とされ、明らかに上りは荷物を運び、下りからは帰る事を前提としている。海路についても日程が記されており、当時、すでに海上交通が発達していたものと想像される。また、瀬戸内に開かれた港は物資の積出港としてだけでなく、風待ち、汐待ち港としての機能も備えていた。

当時は北陸道の国々の物資は越前の国の駿河に集まり、そこから陸路で琵琶湖まで運ばれ、また水運を利用し都へ運ばれた。従って瀬戸内海は九州、四国、中国地方の物資の輸送が中心であったと思われる。

延 喜 式

	卷二十四主計上	卷二十八兵部省	卷二十二民部上	備 考
畿内				
山城国		山崎		
大和国	行程。一日			
河内国	行程。一日	楠葉。槻本。津積。		
摂津国	行程。一日			
和泉国	行程。上二日。下一日	日部。呼喚。		
東海道				
伊賀国	行程。上二日。下一日	鈴鹿。河曲。朝明。榎撫。市村。飯高。度會。		
伊勢国	行程。上四日。下二日			
志摩国	行程。上六日。下三日	鴨部。磯部		
尾張国	行程。上七日。下四日	馬津。新溝。兩村。		

瀬戸内の町並みと建物

	卷二十四主計上	卷二十八兵部省	卷二十二民部上	備 考
参河国	行程。上十一日。下六日	鳥捕。山綱。渡津。		運漕費を記す
遠江国	行程。上十五日。下八日	緒鼻。栗原。□摩。横尾。初倉。		運漕費を記す
駿河国	行程。上十八日。下九日	小川。横田。息津。圃原。長倉。		
伊豆国	行程。上廿二日。下十一日			
甲斐国	行程。上廿五日。下十三日	水市。河口。加吉。		
相模国	行程。上廿五日。下十三日	坂本。小總。箕輪。濱田。		
武蔵国	行程。上廿九日。下十五日	店屋。小高。大井。豊島。		
安房国	行程。上卅四日。下十七日	白園。川上。		
上総国	行程。上卅日。下十五日	大前。藤瀧。島穴。天羽。		
下総国	行程。上卅日。下十五日	井上。浮島。茜津。於賦。		
常陸国	行程。上卅日。下十五日	榛谷。安侯。會欄。河内。田後。小田。雄薩。		
東山道				
近江国	行程。上一日。下半日	勢田。岡田。甲賀。篠原。清水。烏籠。横川。穴太。和爾。三尾。鞆結。		
美濃国	行程。上四日。下二日	不破。大野。方縣。各務。可兒。土岐。大井。坂本。武義。加茂。		
飛驒国	行程。上十四日。下七日	下留。上留。石浦。		
信濃国	行程上廿一日。下十日	阿智。育郎。賢錐。宮田。深澤。覚志。錦織。浦野。亘理。清水。長倉。麻績。多古。沼邊。		
上野国	行程。上廿九日。下十四日	坂本。野後。群馬。佐位。新田。		
下野国	行程。上卅四日。下十七日	足利。三鴨。田部。衣川。新田。磐上。黒川。		
陸奥国	行程。上五十日。下廿五日	雄野。松田。磐瀬。葦屋。安達。湯日。岑越。伊達。□借。柴田。小野。名取。玉前。栖屋。黒川。色麻。玉造。栗原。磐井。白鳥。瞻澤。磐基。		
出羽国	行程。上冊七日。下廿四日。海路五十二日	最上。村山。野後。避翼。佐芸。遊佐。蚶方。由理。白谷。飽海。秋田。		
北陸道				
若狭国	行程。上三日。下二日			運漕費を記す
越前国	行程。上七日。下四日 海路六日			運漕費を記す
加賀国	行程。上十二日。下六日 海路八日			運漕費を記す

	卷二十四主計上	卷二十八兵部省	卷二十二民部上	備 考
能登国	行程。上十八日。下九日海路廿七日			運漕費を記す
越中国	行程。上十七日。下九日海路廿七日			運漕費を記す
越後国	行程。上卅四日。下十七日海路卅六日			運漕費を記す
佐渡国	行程。上卅四日。下十七日海路四十九日			運漕費を記す
山陰道				
丹波国	行程。上一日。下半日			
丹後国	行程。上七日。下四日			
但馬国	行程。上七日。下四日			
因幡国	行程。上十二日。下六日			運漕費を記す
伯耆国	行程。上十三日。下七日			
出雲国	行程。上十五日。下八日			
石見国	行程。上廿九日。下十五日			
隠岐国	行程。上卅五日。下十八日			
山陽道				
播磨国	行程。上五日。下三日海路八日	明石。賀古。草上。大市。布勢。高田。野磨。越部。中川。	近国 大 明石。賀古。印南。しか磨。掛保。赤穂。佐用。宍粟。神埼。多可。賀茂。美義。	運漕費を記す 調塩
美作国	行程。上七日。下四日		近国 上 英多。勝田。苦東。苦西。久米。大庭。真島。	運漕費を記す
備前国	行程。上八日。下四日海路九日	坂長。珂磨。高月。津高。	近国 上 和氣。磐梨。邑及。赤坂。上道。御野。津高。兒島。	運漕費を記す 調塩／庸塩
備中国	行程。行程。上九日。下五日海路十二日	津口。川邊。小田。後月。	中国 上 都宇。窪屋。賀夜。下道。浅口。小田。後月。哲多。英賀。	運漕費を記す 調塩
備後国	行程。上十一日。下六日海路十五日	安那。品治。者度。	中国 上 安那。深津	運漕費を記す 調塩／庸塩
安芸国	行程。上十四日。下七日海路十八日	真良。梨葉。都宇。宇鹿。附口。木綿。大山。荒山。安芸。伴部。大町。種飽。濃畠。遠管。	遠国 上 沼田。賀茂。安芸。佐伯。山縣。高宮高田。沙田。	運漕費を記す 調塩／庸塩
周防国	行程。上十九日。下十日	石国。野口。周防。生屋。平野。勝間。八千。賀寶。	遠国 上 大島。玖珂。熊毛。都濃。佐波。吉敷。	運漕費を記す 調塩
長門国	行程。上廿一日。下十一日海路廿三日	阿潭。厚狹。埴生。宅賀。臨門。阿津。鹿野。意福。田宇。三隅。参美。◇田。阿武。佐。小川	遠国 上 厚狹。豊浦。美 _田 。大津。阿武。	運漕費を記す
南海道				
紀伊国	行程。上四日。下二日海路六日	萩原。賀太。		運漕費を記す 調塩

瀬戸内の町並みと建物

	卷二十四主計上	卷二十八兵部省	卷二十二民部上	備 考
淡路国	行程。上四日。下二日 海路六日	由良。大野。福良。		運漕費を記す 調塩
阿波国	行程。上九日。下五日 海路十一日	石濃。郡頭。		運漕費を記す
讃岐国	行程。上十二日。下六日 海路十二日	刈田。松本。三谿。河内。甕 井。杵田。		運漕費を記す
伊予国	行程。上十六日。下八日 海路十四日	大岡。山背。近井。新居。周 敷。越智。		運漕費を記す 調塩
土佐国	行程。上卅五日。下十八日 海路廿五日	頭駅。吾椅。舟「治」川。		運漕費を記す
西海道				
大宰府	行程。上廿七日。下十四日 海路卅日			
筑前国	去府行程。一日			運漕費を記す
筑後国	行程。一日			
肥前国	行程。上一日。下一日			
肥後国	行程。上三日。下一半日			
豊前国	行程。上二日。下一日			
豊後国	行程。上四日。下二日			
日向国	行程。上十二日。下六日			
大隈国	行程。上十二日。下六日			
薩摩国	行程。上十二日。下六日			
壱岐国	海路行程三日			
対馬国	海路行程四日			
注	上 陸路 下 海路 空欄 記載無			

江戸が政治の中心地となり、上方と江戸の2大都市で構成されるようになると、5街道（東海道、中山道、甲州街道、日光街道）が整備され、中国道（山陽道）は脇街道の扱いを受けることになる。しかし、樽回船、菱垣船の発達により、日本全国の沿岸に沿って海上交通が整備され、大消費地である江戸への物資輸送の需要が増すことになる。このような商品は江戸入津品と呼ばれ、米・味噌・酒・薪・炭・水油・魚油・醤油・木綿・塩・銭などであった。

また、北前船は、大阪で酒・紙・煙草・木綿・砂糖・古着類を積み、西回り航路を蝦夷地に向かい、途中の寄港地でも積荷の売買を行い、蝦夷地で荷を売り昆布・鯨・身欠・白子干鰯などの海産物を買入れ、また大阪へと向かった。

一方、航海技術や、船の大型化に伴い、「地乗り」（沿岸部に沿って、山や岬を目指して航海する）

のに対し、「沖乗り」が発達し、旧来の港に加え新たな港が開かれることとなる。

参勤交代の制で、江戸と地方が結ばれるようになるとともに、庶民の間で旅行が一般化し、人の往来が多くなり、名所案内が盛んに発行された。

「大日本名所旧跡見立相撰」「大日本神事見立数望」「諸国御祭礼番付」に下記の名所、祭礼を上げている。

	「大日本名所旧跡見立相撰」	「大日本神事見立数望」 「諸国御祭礼番付」
攝津	須磨浦、一ノ谷、浪花津、住吉浦、浪花江、あくた川、長柄の橋、誕生石、布引の滝、さしの姫松、茶うす山、江口、野田ノふじ、わだノ岬、羽生ノ山田、みのおノ滝、求女塚	住吉祭、西宮祭、呉服祭
播磨	室ノ津、高砂浦、明石浦、舞子浜、そがれ松	
美作		津山祭、宝明神祭
備前		瑜伽祭、岡山祭
備中	二万ノ郷、吉備中山	
備後	鞆の浦	鞆天王祭、天王祭
安芸	宮島	宮島祭
周防	岩国山、けわい坂、錦帯橋	山口祭
長門	壇ノ浦	和布刈祭、下関祭

一方庶民の旅とは異なり公的な交流も盛んとなり大人数の一行が、瀬戸内を行き来している。以下代表的なものについてまとめた。

琉球使節1634～1850 18回

琉球使節は薩摩藩が幕府の威光を背景に慶長14年（1609）琉球を侵略し王を虜にして帰った。静岡に居た家康、続いて江戸の将軍秀忠に謁見させ、入貢を誓わせた。ここに琉球を附庸国として、異国の支配者としての權威を誇示するとともに、日本と明国との貿易復活の仲介の労をとらせた。

寛永11年（1634）を第一回とし、嘉永3年（1860）を最後に計18回の慶賀使と謝恩使が琉球使節として来日している。

江戸までの全行程の詳細は省略するが、海路、陸路に分かれた一行は小倉で合流し、後は瀬戸内の西国道に沿った沿岸をたどり、大阪、淀川を上り京都へ入った。代表的な寄港地として赤間関、上関、津和、蒲刈、鞆、牛窓、大阪などである。一行の総勢は正徳4年（1714）の170人を最高に、おおむね100名程度であった。

オランダ商館長江戸参府 1633～1860 166回

江戸時代、平戸後に長崎にあったオランダ東インド会社の日本支店をオランダ商館と呼び、この館長が通商免許のお礼のため、江戸に上って将軍に拝謁し、献上品を贈るもので、お礼参り、拝礼、参礼、参府などとも呼ばれた。慶長14年（1609）に始まり、その後一時途絶えるが、日本・オランダの貿易が再開された寛永10年（1633）から恒例化され、毎年参府するようになる。寛政2年（1790）

以後は商売高の減少により献上品もこれまでの半分之一になると同時に4年に1回の参府となる。

通常90日程度の日数を要したが、最長は143日、最短は67日であった。一行は商館長、書記、外科医、助役など数人のオランダ人のほか、通詞、平戸藩の役人（後に長崎奉行所役人）およびその人達の世話係りが同行し、総勢60名程度であった。

江戸までのルートの概略は、琉球使節と同様、長崎を海路と陸路で立ち、小倉で合流し、海路で下関、上関、家室、蒲刈、御手洗、鞆、牛窓、室、兵庫と海路を利用し、兵庫からは陸路で江戸へ向かった。時には大阪まで海路を利用する事もあった。琉球使節と同様、幕府の公船としての一般的義務を果たせばよく、天候や風、潮次第で、寄港したり素通りにする場合など、その時々によって、ルートを変更できる旅であった。

朝鮮通信使

江戸時代主として將軍の襲職ごとに祝賀のために来朝した朝鮮からの使節で、朝鮮との通交は慶長10年（1605）徳川家康のときに始まり、その第一回は同12年（1607）であった。この和約は、対馬の宗氏を介して無理に修交させた事情もあり、国威発揚の意図もあり、その処遇は丁寧をきわめ、その費用は100万両にも達したと言われる。

当時瀬戸内を往来する外国船は、この通信使のほか、上記のオランダ商館参府、琉球使節があるが、この朝鮮通信使は国を挙げての行事で沿岸大名に接待を命じ藩を総動員して用意した。そのルートにご馳走所をもうけ、半年位前から用意に追われた。

下関に入るまでは、オランダ商館参府、琉球使節などと異なるが、それ以降はほぼ同じようなルートを取る事となる。

参勤交代

参勤交代の制度の起源は中世にさかのぼるが、近世初頭、豊臣秀吉の時代に諸大名が京都、大阪などに例年のぼって秀吉に拝謁する上洛参勤のかたちをとる。慶長8年（1603）以後家康が征夷大將軍に就任すると、家康は諸大名に江戸参勤を強要した。寛永12年（1635）の「武家諸法度」の制度的整備により、参勤交代の制度は確立する。北海道の松前藩や九州・四国の諸大名や中国大名の一部は瀬戸内海の航路から東海道へ入った。諸大名参勤道中の供人数制限があったが、加賀百万石の金沢藩で、総勢2500人にのぼった例があり、一宿を通過するのに3日を要したという。その後、財政難から、その規模は縮小されたが、諸街道を通行する大名行列は150人から300人程度がもっとも多かった。

製塩について

岩塩を産しない日本では、稲作以来塩を必要とし各地で生産されたと思われる。古代の製塩法は土器に海水を入れ煮たものであり、燃料が必要だがどこでも生産出来た。その後行われた藻塩焼製

塩法も多少改良されたものであるが同じく多量の燃料を必要とした。奈良時代、平安時代の初期にかけては海岸地帯の遠浅の潟を利用した自然浜製塩で、これは日照と風で結晶する塩を利用するので、地域が限定される。鎌倉時代から室町にかけて揚浜式塩田製塩法が広まり、瀬戸内が塩の生産地域となった。この方法は長い間わが国の製塩を支配した。その後流下式塩田法が取り入れられたが、国の製塩政策の転換で全国的に塩田の姿を消すこととなる。

生活必需品としての塩は大切な商品として瀬戸内の塩生産諸国から都に運ばれた。延喜式の記事によると、播磨国、備前国、備中国、備後国、安芸国、周防国（以上山陽道）、紀伊国、淡路国、伊予国（以上南海道）に庸、調として指定している。瀬戸内海沿岸がいかに塩の生産地として適した地域であったか判る。特定の地域で生産される塩は全国へ輸送され、塩田と海運は切っても切れない関係がある。塩田には必ず港がひらかれている。

塩の生産地は河口近くの土砂が堆積して出来た開けた広い土地を塩田として利用されたが、これも土砂の堆積で利用できなくなり、新しく開発された歴史を持ちしだいに沖の方向へ移動したと考えられる。

瀬戸内の赤穂、味野、松永、三田尻、竹原、平生など数多く塩田が経営されその繁栄を誇った。

製塩業は、国の政策転換により急速にその必要性を失い、没落することとなり町並みが取り残されたように現存する場合が多い。かつては宿場町として栄えた町が、鉄道などの敷設で、その存在意義がなくなり、そのままの状態で保存されているケースは数多い。同じような現象が塩田で栄えた町にもいえる。しかし、広大な塩田跡は土地としての利用価値が高く、工場などに利用されることが多い。

各 港 の 現 状

■兵庫の津（兵庫県神戸市）

西国街道の要衝の地であり兵庫宿本陣と脇本陣があった。本陣の「井筒屋」のほか明石屋、豊島屋、枳屋、三木屋の4軒の脇本陣があり、また、旅籠がたくさんあった。人足25人馬25頭の人馬が置かれた。本陣・浜本陣ともに今はない。

江戸時代、北前船の活躍が、兵庫に「天下の台所」大阪の外港としての地位を用意した。1639年、加賀藩主前田利常が1万石の米の売りさばきを大阪の淀屋个庵に依頼し、个庵と親交のあった兵庫の北風彦太郎がその運送を引き受けたことが、北前船の先駆となった。当時、大阪湾は水深が浅く大阪に入る船が兵庫の津で汐待ちをしたり、積荷を小船に積み替えをすることが多かった。ケンペルは「日本誌」のなかで、「元禄年間、300隻より少なからざる船舶が停泊せる」と記している。また兵庫は滞在した朝鮮通信使の一行も「兵庫を以って、下関以东第一の港泊である」と述べている。兵庫はこの北風家と共に繁栄し、「兵庫の北風か、北風の兵庫か」といわれる豪商となった。一時衰退をみるが、19世紀に入ると淡路出身の高田屋嘉兵衛らと同じく蝦夷地の物産を取り扱い勢いを盛り返し、各方面で神戸の繁栄に尽力した。北風家も明治20年代になって家運が傾き、鍛冶屋町に

あった邸宅も今はない。

豊臣秀吉の朝鮮出兵以後国交が無かった朝鮮とは、慶長12年（1607）己酉条約の成立により朝鮮との国交が回復した。以後江戸時代を通じて将軍の代わり等の慶事には朝鮮から通信使が来日した。通信使が江戸へ向かう途中、兵庫の津に11回立ち寄り、そのうち10回は宿としている。どの港でも同じであるが、接待費は100万両にも達したといわれ、これらの費用は沿道の大名や周辺の町村に割り当てられ、兵庫の津の人々の負担はおおきかった。文化8年（1811）に、財政窮乏を理由に対馬での行事にのみとどめることとしたので、以後は行列を組んでの国際的な行事も廃止された。

平清盛と大和田の泊の改修は有名である。日宋貿易の拠点として知られる。日明貿易の拠点でもあった。室町時代に17回90隻の遣明船を仕立てているが、そのうち13回66隻が兵庫の津から出帆している。また、朝鮮通信使が江戸に向かう途中11回立ち寄っており、10回は宿をとっている。400～500人に及ぶ一行を迎えるのは大変で、兵庫の津の人はその負担に苦しめられた。

このことはどこの寄港地もみな同じ悩みを経験している。

日本が開港してからは、三宮、元町の南が居留地となり、貿易が活発に行われ、横浜と並ぶ国際貿易港となった。戦災や時代の変化で近世のものはほとんどなく、近代の建物は、北野町あたりの異人館群、海岸通りの洋館建物は、先の震災にも関わらず、数多く残っている。

■須磨の関（兵庫県神戸市）

大宝律令にも攝津の関として名が残る関所で海路、陸路の両方の要衝にあたる関所であった。平安時代末期の歌人源兼昌の「淡路島 かよう千鳥の鳴く声に いく夜寝ぞめぬ須磨の関守」と詠われている。源平の古戦場でもあり、源義経が敦盛の首実検をしたところとしても知られる。

■垂水（兵庫県神戸市）

「日本書紀」によると神功皇后が朝鮮に遠征したとき、底津綿津見神、中津綿津見神、上津綿津見神の3神も軍に従って皇后を助け、遠征の帰路この地の沖合いで暴風雨にあい、船が進まなくなったときにもこの3神の加護で風雨がおさまリ、無事帰還できた。そこでこの地に社殿を建てて3神を祀ったとしている。この「わたつみ神社」では、神幸祭（海上渡御）が行われ、神輿をのせた御座船が、飾りたてた漁船を従えて、舞子浜まで華やかに往復する神事が行われる。

このあたりは兵庫の津の手前の海路の難所の一つであったことを窺わせる。

■明石（兵庫県明石市）

明石海峡は門柱のない海の関門で、古くは明石大門（おおと）と呼ばれた。難波津からそこをくぐり出る船の旅人は振りかえって生駒山を仰ぎ、遠ざかる都を惜しみ、逆に遠い海路を経てきた柿本人麻呂は、この大門で、「天離（あまさか）る夷（ひな）の長道（ながじ）ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ」と詠みようやく都に帰り着いたと感激を新たにしている。行政的にも明石の大門は摂津と播磨の関門であり、風土記の頃は畿内と畿外との区切りでもあった。

■室津（兵庫県御津町）

「播磨風土記」に室のように風を防ぐ泊りであるとあり行基が定める播磨五泊の西端で奈良時代に栄えた。

西国大名の参勤交代の時この港から上陸したので宿場町として栄え、薩摩屋をはじめ肥前屋、肥後屋、紀伊国屋、筑前屋、一津屋の6軒の本陣があり、「室津千軒」といわれ賑わった。旧豪商「魚屋」の屋敷が修復されている。海藻類や生活物資をおもに扱い姫路藩の御用金用立も行った。本陣が手狭なときは豪商の家にも分宿したので魚屋にも大名専用の出入口や1階の奥座敷、2階上段の間があるなど20室150帖を超える大規模な建物であった。瀬戸内では代表的な港の一つに数えられる。

■坂越浦（兵庫県赤穂市）

古くからこの土地の「津長」という言葉が見られ、その役職・地位は不明であるが、おそらく港湾管理者と思われる。東大寺の庄としての縁もあった。

文安2年(1445)に坂越の船が鰯・海鼠を積んで兵庫北関を通関しているから、漁業も盛んであったと思われる。永禄8年(1565)には宣教師フロイスが堺への便船待ちでしばらく逗留している。羽柴秀吉の中国征伐により赤松政憲が減ぶが、この時毛利軍は700艘の兵船を室津～坂越浦に派遣している。

近世に入り西回り航路が開設され、瀬戸内各地で諸産業を発達させる契機となるが、坂越も例外ではなかった。坂越浦の船数は113艘との記録があり、多くは直乗り（自分の所有する船に乗る）が多く活躍したと思われる。この地方の廻船は千種川を中心に活躍するもの、製塩地方の廻船は大阪へ塩を運ぶものなどがあったが、坂越浦の船は、難破の記録などから見ると、日本全国広範囲に活動していたものと思われる。18世紀の坂越の廻船の活躍を示すものに田代米の輸送がある。対馬藩の飛地であった肥前国田代（佐賀県鳥栖市）の年貢米を大阪・対馬までの廻漕を請け負っている。また、竹原の塩の購入の記録がある。

港町としての機能も発展し、船宿が30軒ほどあり、船乗り相手の小商売も盛んに行われた。

安永5年(1776)の入港した船籍記録によると、わずか10日ほどの間に、攝津4、和泉1、紀伊1、播磨5、備前12、備中3、備後2、安芸3、周防4、石見2、讃岐12、伊予7、阿波5、豊前5、豊後10、肥前4、肥後2、筑前2、筑後1、尾張1、不明4の合計61艘が入港している。

■赤穂（兵庫県赤穂市）

古くから塩田の存在が知られるが、本格的な塩田開発は江戸時代、赤穂藩池田氏から浅野氏、森氏と引き継がれた。池田藩時代には、中世以来の古式入浜が拡張され、さらに近代的な入浜式塩田に改良された。浅野氏の時代に入ると姫路藩からの移住塩民の手で入浜塩田への改造、開拓が行われ、千種川兩岸に400ヘクタールの広大な塩田地帯が形成され赤穂は塩の町となった。

合理化された入浜塩田はその技法が瀬戸内海沿岸の各地に伝播し瀬戸内十州で日本の塩の80～90%を生産するようになった。

この製塩技法は児島、松永、竹原、三田尻、小豆島、引田、坂出、丸亀をはじめ仙台、熊本、天草、鹿児島などに伝えられた。

当時の大消費地江戸をはじめ上方に販路を持っていたが、岡売りと呼ばれ領内奥地へ運ばれた。また、赤穂の近隣の龍野へ運ばれ醤油製造の原料ともなった。

■尻海港（岡山県牛窓町）

岡山県錦海湾に面する尻海港は、岡山藩大坂廻米として指定され瀬戸内海の良港として栄えた。岡山藩の加子浦として藩の廻米積出港であったほか、廻船の風待ち・汐待ち港でもあった。ここも、塩田が広がり塩の生産も行われた。

■牛窓（岡山県邑久郡牛窓町）

「万葉集」の恋歌にも詠まれ神功皇后伝説も伝わる古い港である。中世には瀬戸内屈指の海運業の基地として栄えた。康応元年（1389）には足利義光も厳島もうでの往復ともに寄港し、復路には牛窓に宿泊している。義光一行の船は100艘を超えており、それだけの人数を受け入れることの出来る町であった。文安2年（1445）に牛窓の船133艘が兵庫に入港している。これは地元兵庫の296艘に次ぐもので、備後の塩、年貢などの物資を運び海運業で栄えた。また兵庫と牛窓間に客を乗せる船も運行されていた。その後、岡山池田藩により整備され、寛永7年（1695）に御茶屋が建設された。これは藩主の別荘であるとともに外交施設の役割を持ち、参勤交代の大名の接待、朝鮮通信使のもてなしの場ともなった。貿易港として商家が立ち並んだ。

朝鮮通信使の接待の様子は各港によく伝わっているが、牛窓もその例外でなく、通信使一行と案内役の対馬藩の一行を加えると、多いときで1000人にものぼった。輦で一行を迎え、室津まで送る送迎のために藩と民間合わせて船943艘、水夫（かこ）3729人が動員された。

■倉敷（岡山県倉敷市）

倉敷は文字通り倉のある町で、倉敷地と呼ばれる所は各地に見られる。米の集散地として栄えた町であるが、もともと浅瀬の海に面しており、浜辺には水夫（かこ）屋敷が開かれ、街道が通じていたが、高梁川の堆積作用が進み、16世紀には干拓が行われ、水田が広がり、海岸線ははるか南に退いた。一本の運河によって海とつながることとなった。現在では児島湾の埋め立てにより、その運河も海とは切り離されてしまい、まったく港町の機能は果たしていない。

大きな河川の河口に開かれた港は、川の土砂の堆積により、多くの場合、現在の海岸線の奥まった部分が古い港となる事が多く、倉敷はこれに合わせ干拓が行われた、典型的な例である。

現在では、保存が行き届き観光客で賑わっている。

■玉島（岡山県倉敷市）

水谷氏が寛永19年（1642）に備中松山藩主となって以来三代にわたる干拓事業を行い、乙島、柏

崎が陸とつながり現在の陸地になった。入り江が絶好の港になり、港町玉島が発展した。干拓された新田は水を必要とするため高梁川から用水路が開削され、この水路を運河として利用した。松山藩の外港として発達し、川船で運ばれた物資は玉島で千石船で積み出された。問屋は松山、川辺、総社など水谷氏の領内各地から集まり、領主の保護を受けた。

扱われた商品は米、茶、薪、あいもの（海産物）干鰯、種子（菜種）繰綿（種を除いた綿）実綿（種のある綿）、綿実（綿の実）、鉄、たばこ、和紙などが取引された。しかし、圧倒的に取引の多かったのは綿である。このように繁栄をした港町であったが、土砂の堆積、政治的要因、鉄道の開設などの理由で、現在では港町としては衰退した。しかし、数多くの漆喰の白やなまこ壁、虫籠窓の建物が軒を並べ見ごたえのある町並みは当時の繁栄を覗わせるものである。

■下津井（岡山県倉敷市）

瀬戸内海に大きく突き出したこの地も、東西航路の要衝で、潮待ち、風待ち港として格好の場所であった。近世にはいり児島が本土と陸続きとなるにつれ、下津井の拠点性はますます強まった。備前と四国の回廊の関門ともなった。当時の内海航路の「地乗り」「沖乗り」とも下津井を経由していた。

参勤交代の西国大名の御座船が寄港し、日本海から大阪へ向かう北前船も寄港し、風待ち、潮待ちの港から商業港へと性格を変えていった。北前船は、干拓地で作られる綿花の肥料として干鰯、鯨のしめかすを北海道から運び、下り荷として繰綿や塩などが積まれた。問屋が盛時には22軒あって、ニシン蔵と呼ばれる大きい古い倉庫を構えた。

一方、四国への通路としても町は賑わい、金毘羅・由加の両詣、四国巡礼が盛んとなり、宿屋、飲食店が立ち並び、遊里にもぎわった。「金毘羅参詣名所図会」には「…中国・西国上下の諸船ここに泊まりて順風を待つ。あるは商家に交易をなし、積むあり揚るあり……繁盛なること児島郡南浜第一というべし。」と記している。

■福山（広島県福山市）

草戸千軒遺跡

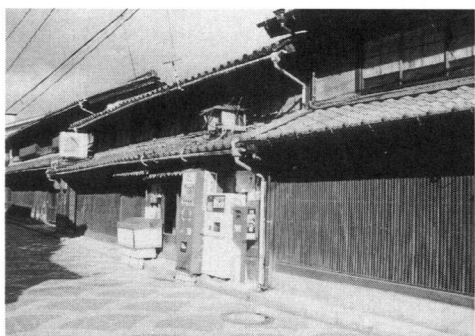
平安時代から近世まで約800年にわたり芦田川河口の港町として栄えた庶民の大集落跡である。

■鞆（広島県福山市）

「吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき」（万葉集 大伴旅人）この地で詠んだとされる。平清盛など平家一門、「とわずがたり」の著者二条、「足利氏は鞆に興り、鞆に亡ぶ」といわれる尊氏・義昭、「日本誌」を著したケンペルなど多くの人の足跡がある。江戸時代は参勤交代の諸大名や外国船も数多く寄港している。

古代から風待ち、潮待ちの港として栄えた。朝鮮通信使は好んで対潮楼を宿所とした。

福山藩の海駅として領内の物資を藩外へ移出するにとどまらず、北国や上方の物資の交易港とし



て繁栄した。船問屋、商家やその土蔵が軒を接して並び、北から原町、鍛冶町、石井町、関町、道越、西町、江の浦、平町と形作られた。七卿落の地としても知られている。

地理的には瀬戸内海の中央に位置し潮流の分岐・合流点で古くから航行する船の潮待ち風待ち港であった。

現在の町の印象は程よく昔の面影がいたるところに残され非常に良い景観を保っている。自動販売機が建物の前にあったり、新しい看板が目につくが、かえって生きた町を感じさせる。あまりに手が届きすぎて、今を感じさせるものを取り除きすぎると映画のセットのようになってしまう。鞆は御手洗（広島県豊田郡豊町）とともに、住民の町に対する意識や誇りの高さを感じさせる町並みである。

■松永（広島県福山市）

本莊重政が万治元年（1658）に塩田の拓築の工事を起こしたのに始まる。以来松永は塩田の町として、その名を全国にはせた。同時に塩の積出港として発展した。北陸地方からの帰りに材木を運び、明治33年（1900）頃から下駄の生産が盛んになり、最近まで下駄の産地として知られた。現在塩田跡はまったく形跡も無い。上之町、中之町、下之町の川辺の町屋が残る。

■尾道（広島県尾道市）

太田の荘は、今の世羅町の大半を占める地域で、高野山領になる以前は、平氏の支配下にあり、嘉応元年（1169）この荘園の年貢積出港として倉敷地がおかれた。倉庫が建ち並び、舵取りや水手などの人々が住み着いた。次第に物資が流通するようになり、問丸と呼ばれる廻船専門者が出現した。

■竹原（広島県竹原市）

久安6年（1150）塩田が造成されて以来広島藩経済政策によって増産され、北前船で北陸・奥羽地方（糸魚川、直江津、柏崎、新潟、庄内、酒田、能代、津軽など）まで売りさばかれ「竹原塩」として全国的にその名をとどろかせた。赤穂の塩田について慶安3年（1650）芸備両国で最初の「入浜塩田」として開発された。この塩田による経済的発展をもとに町人文化が栄え、頼一門や頼山陽が出るにいたった。

昭和34年（1959）国の塩業政策の転換により全面的に廃止された。

現在では松阪邸をはじめ多くの建物が残り、国重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。最近訪れての感想は、更地が町並みを切断しているのは残念である。10年ほど前に尋ねた時は、新しく建てられた建物が混ざっていた印象を受けたが、町筋としての流れが感じられた。

■御手洗（広島県豊田郡豊町）

中世までは「地乗り」であったが近世に入ると内海中央部に航行する「沖乗り」が発達した。寛永年間（1624～1644）には農耕地で一筆の屋敷もなかったが御手洗は、この「沖乗り」の要衝にあたり、多くの船舶が立ち寄るようになった。

前方に岡村島を配し、その絶好の地形とあいまって、風待ち・潮待ちの船泊として絶好の地であった。

三条実美（さねとみ）ら少壮公卿は、長州藩と結んで「攘夷親政」をはかろうとしたが、孝明天皇にうけいれられず、長州へ下った。京都の状況が好転したとの情報を得た実美ら七人は、上洛の途につくが、讃岐の多度津まで来た時に、蛤御門の変で長州勢が破れたことを知り、再び長州へ向かった。1864年7月22日には鞆の保命酒の本舗中村家に、ついで23日には多田家に泊まり、24日朝上関へ向かった。

寄港船はオランダ、中国などの外国人をのせた船、琉球王の使者船、長崎奉行などの幕府役人の船、九州・四国の参勤交代の大名の船、西回り海運の廻船と多様で盛況を極めた。他国商品の中継ぎ商業の役割も担った。シーボルトも文政9年（1826）江戸からの帰路立ち寄っている。若胡子屋、七卿落遺跡などの史跡がある。

住民の意識の高さを感じさせる、大切に使われている建物が多く、観光地化されない落ち着いた町並みが残り非常に感じの良い印象がある。



■蒲刈・三之瀬（広島県安芸郡下蒲刈町）

蒲刈の地名は平安時代以来、瀬戸内を往来する旅人の紀行文にしばしば見られ、古くからの海上の要衝であった。慶長12年（1607）から12回にわたる朝鮮通信使は、（うち11回）三之瀬に立ち寄っている。通信使一行の交流を通じて、多くの文化的な影響を受けている。安芸の海駅に指定された。三之瀬御本陣跡、蒲刈島番所跡、三之瀬朝鮮通信史宿館跡、下蒲刈町歴史民俗資料館など整備されている。

■鹿老渡（広島県安芸郡倉橋町）

倉橋島の南端に位置し、「沖乗り」の発達した後の港町であり瀬戸内海の中央部に安芸灘に面する良港である。地形はもちろん港としての機能を持つものであり、風待ち、潮待ちの帆船や、九州の大名たちが、参勤交代のおり立ち寄った。日向地方の材木を扱った宮林家は日向の藩主もしばしば宿にしたという建物があるが、現在では、ひなびた漁村といった風情しかない。広島藩の海駅として指定されていた。

■広島（広島県広島市）

大田川河口（現在の広島市安佐南区祇園町あたり）に、平安末期に厳島神社の倉敷地が置かれており、山県郡からの莊園年貢運搬の中継地となった。このような川舟から海船への積替え場所であり、同様の機能を持つ港は他にたくさん見られる。面影を残すような感じはなく、大都市になっている。

■柳井（山口県柳井市）



江戸時代には岩国藩の納戸と呼ばれ、岩国藩領の産物や荷物が大阪へ向けて出荷された。宝来橋あたりがかったの柳井津町の中心である。

柳井の地名はこの寺の境内にある柳と井戸に由来するといわれている。約1400年前、豊後の国に住んでいた満野長者（まののちょうじゃ）の娘般若姫（はんにゃひめ）は橘豊日皇子（たちばなのとよひのみこ＝後の用明天皇）に迎えられて上京の途中

この地に立ち寄り、ここに湧き出る清水を飲まれ、そばに柳の楊枝をさしたという。後にこの柳が芽を吹き、以来地名を「楊井（柳井）」と呼ぶようになったと伝えられている。

江戸時代から海運によって栄えた商都柳井のシンボルともいえるのが、JR柳井駅から徒歩5分のところにある古市・金屋地区の白壁の町並みである。東西約270mの家並みは妻入り、本瓦葺、2階建、漆喰塗の大壁造の商家が連なり、全国でも貴重な町並みである。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

国森家住宅

柳井が近世商業都市として繁栄した18世紀後半に建てられたもので、江戸中期、商家の構えの典型として国の重要文化財に指定されている。間口8.5m、奥行16.5m、妻入り、入母屋、本瓦葺土蔵造りの2階建て、1階正面には必要に応じて全開できる「ぶちょう」と呼ばれる板戸がある。さらにその前には一本引きの土戸があり、火災のときにはこの土戸をはめて戸と戸の間に味噌を塗って密閉し、類焼防止をしたという。

民俗資料館むろやの園

「むろやの園」の名前は、小田家が油屋を業としていた当時の屋号「室屋」に由来する。「室屋」は最盛期には帆船50隻を持つ、西日本有数の油商であった。「むろやの園」は、細長い屋敷構えをしたたたずまいで、現在も創業当時とほとんど変わっていない。南北に119mあり、屋敷面積は2,561㎡でわが国に存在する町屋のなかでは最大のものといわれている。また、この屋敷内に展示されたほとんどの品は、小田家が代々使用してきたもので、建物とともに生活用品1,553点、文書

1,011点が山口県有形民俗文化財に指定されている。

町並みがきれいに改修され保存され観光地となっている。

■ 上関・室津（山口県上関町）

内海に付き出たところで内海航路の要衝として重要な港町であり、江戸時代には上関番所を置き、



警備や見張りの他、積荷の検査や税金の徴収を行ない、政治的にも重要であった。町はかなり活気にあふれた港町であるが、平成8年に移築復元された上関番所や県内洋風建築最古の一つの四階楼などの文化財があり、活気にあふれた港町で、海岸から一本奥の道には古い建物が数多く残っている。しかし、かなり雑然とした印象が免れない。町並みを保存しようとする動きがあるようであるが、期待したい。

■ 室積（山口県光市）

古くから天然の良港として栄え、江戸時代には長州藩が米の売り捌きを中心として港に出入りする船との交易を許可したことから、瀬戸内の廻船や北前船など多くの船が出入りし、港町として大いに発展した。かつての雰囲気を残す建物が随所に残っており、ひなびた町である。



■ 三田尻・中関（山口県防府市）

江戸時代、三田尻は毛利藩の御舟倉がおかれ海の玄関として栄えた。御舟倉跡が残る。慶長16年（1611）下松からこの地に移された。藩では御舟手の将官を警固町に住ませ、船頭以下は上ノ町・中ノ町・青木町・上町・中町においた。

藩の御舟倉のおかれた三田尻港は毛利水軍の拠点となっていたので、藩は近くに新しい商業港をつくり、上関と下関の中間に位置することから中関と命名した。一部古い町並みは残るが、開発が激しく、町は変貌している。

塩田も大規模に経営され、今は三田尻塩田記念公園として残る。

■ 下関（山口県下関市）

本州最西端に位置し、古くは穴門・赤間関などと呼ばれ、九州との連絡上の要衝の地であった。長府・壇之浦・赤間関をめぐる海峡で源平両氏の雌雄が決められ、平氏一門は文治元年（1185）こ

こで滅亡したのはあまりにも有名である。弘安4年（1281）の元寇に際して長門に探題が設けられたが、近世に入ると下関地域の政治的支配は複雑を極めた。文久3年（1863）馬関戦争で外国船との砲火を交えるなど、外国との接点の地となった。明治維新後は、門司とともに大陸との重要な港となり、日清戦争の講和談判の行われた春帆楼がある。また、旧英国領事館もおかれ近代日本の貿易港として確立した。

参 考 文 献

- 中国新聞社 広島県文化百選 史跡編
中国新聞社 広島県文化百選 建物編
下刈蒲町 紀行文などにみる下刈蒲あたり 下刈蒲文化財保護委員会
下刈蒲町 琉球使節の江戸上りと刈蒲 下刈蒲文化財保護委員会
下刈蒲町 オランダ商館長の江戸参府と刈蒲 下刈蒲文化財保護委員会
赤穂歴史博物館 常設展示案内
赤穂歴史博物館 坂越廻船と奥藤家
山川出版社 山口県の歴史散歩
山川出版社 広島県の歴史散歩
山川出版社 兵庫県の歴史散歩 上
山川出版社 兵庫県の歴史散歩 下
新人物往来社 津・泊・宿 中世都市研究会
竹原市 竹原の町なみ 竹原市教育委員会

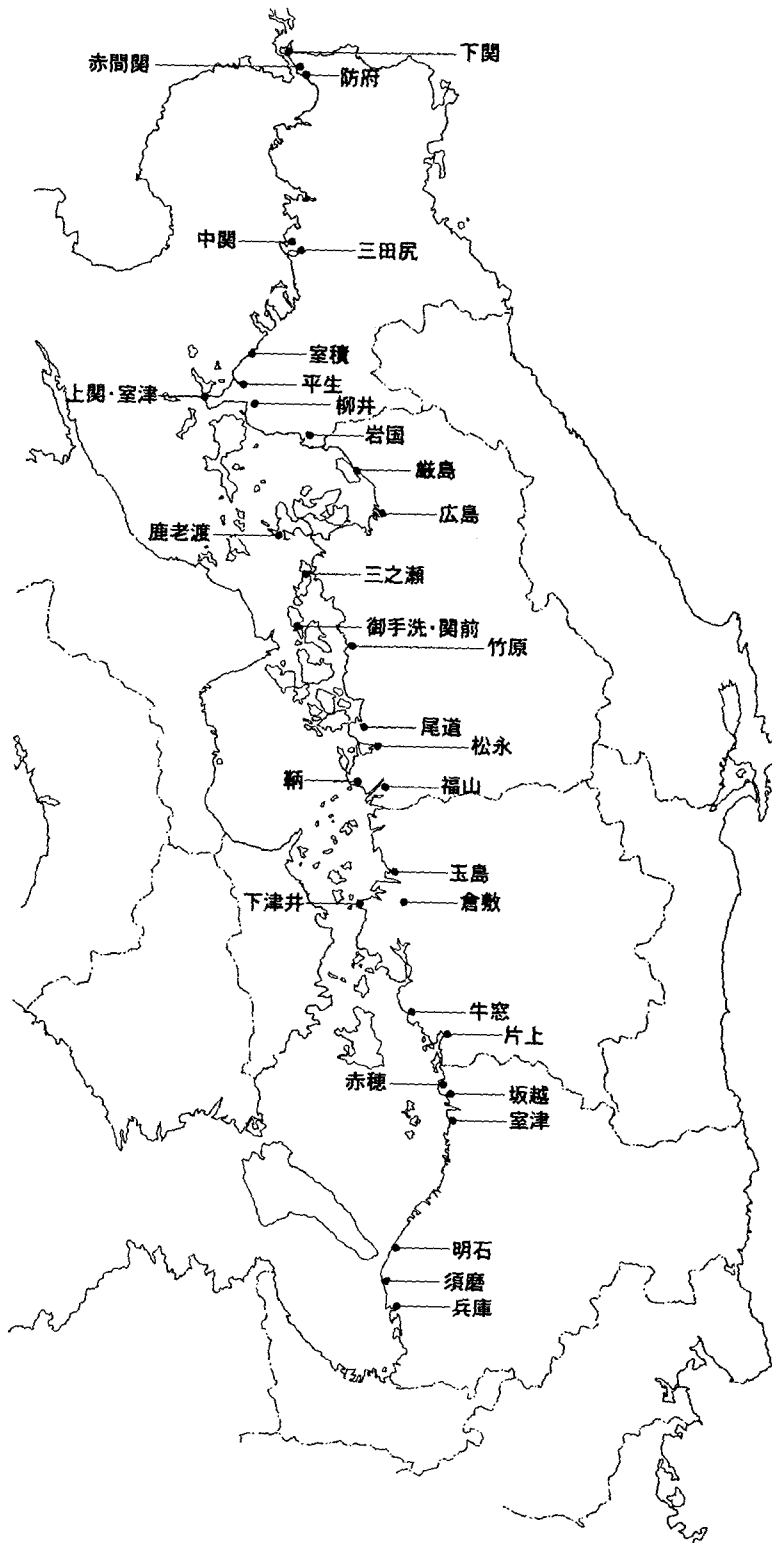


図 瀬戸内の港町